様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０３４０

研究課題名（和文）現代オーストラリア演劇の中のグローバリズムと多文化主義

研究課題名（英文）Globalism and multiculturalism in contemporary Australian theatre

研究代表者
澤田　敬司（Sawada, Keiji）

早稲田大学・法学学術院・教授

研究者番号：５０２４７２６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代オーストラリア演劇の最新の展開を、①アジアでの翻訳・国際共同制作についての上演・受容、②メインストリーム文化へのエスニック・マイノリティの介入、③多文化社会の描写とグローバルな読み替え、④多文化を主題とする演劇の展開、⑤サスティナビリティ、ディスアビリティ、グローバリズムなど、オーストラリア主流社会における主要テーマ、という切り口から分析・検証を行った。その研究成果を、本研究者は日本や海外で出版された単著や共著、国際学会での招待講演などで積極的に公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
グローバリズムと多文化主義に関する主題に取り組むオーストラリア劇が制作され続けており、またディスアビリティ演劇もオーストラリア演劇の注目すべき要素の一つとなっている状況が、本研究を通して明らかになった。さらに、オーストラリア演劇のアジアでの上演と国際共同制作では、日本の演劇人とのコラボレーションや現地の観客の視点は、新しい視点を作品に加えていた。本研究を通して得られたいくつかの成果は、今後、研究者がドラマトゥルクとして参画する日本における新たな演劇作品制作にも活かされることになる。これらを通して、日本の観客や演劇人に、オーストラリア演劇の先端的な取り組みを供することができる。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated the latest development of Australian contemporary theatre through the following viewpoints: (1) Translations of Australian plays and Australia-Asia theatrical collaborations, and their reception in Japan; (2) Ethnic minorities' intervention to the mainstream culture; (3) The way of depicting multicultural Australian society and the way of reading it form Japanese perspectives; (4) The development of Australian plays with multicultural subjects; (5) New subjects in recent Australian plays including sustainability, globalism, and disability. Research outcomes gained through this research project were made public in the forms of books, essays, and keynote paper at an international conference.

研究分野：演劇学、オーストラリア研究

キーワード：現代演劇　多文化主義　グローバリズム　オーストラリア

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

オーストラリアの多文化主義については、オーストラリア国内では数多くの研究の蓄積がある。しかし教育や言語政策などオーストラリア地域研究のもっとも活発な分野では、オーストラリアをモデルケースと見て、多文化社会オーストラリア発の諸制度を多文化化する日本へ導入することを想定した研究が数多く見て取れる。多文化主義に関しては、以前は国力を増強するためにオーストラリア国内に移民を積極的に取り入れ、また難民にも門戸を開く政策をとり、その対応として様々な多文化主義的施策がなされてきた。ところがオーストラリアの国際的な地位によって多文化主義にも変化が生じ、このような現状は、演劇にもいち早く影響を及ぼしてきた。

２．研究の目的

グローバリズムの中でオーストラリアは、英米からの庇護をうけつつ一方的に文化的産物を受け入れる旧植民地の国から、国際的な政治力と経済力をつけ、文化的にも海外へ影響を及ぼす国へと、立ち位置を大きく変化させている。そしてその変化に、ポストコロニアル的状況も、国是である多文化主義も、多大な影響を受けつつある。現代演劇は、このような変化を敏感に映し出していると考えられる。本研究は、特にオーストラリア社会に変化の兆しが見えた２０００年以降の現代オーストラリア演劇の個々の作品と国内外の上演環境を分析することで、主流社会、先住民、国の周囲にある文化とのあいだの相関関係を明らかにしながら、オーストラリアを取り巻く多文化状況の一局面を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

オーストラリア現代演劇に映し出される多文化状況を、マイノリティ文化、マジョリティ文化、国際交流によって出会う文化に、等しく比重を置きながら探求するという目標を達成するため、「アジア太平洋とインターカルチュラリズム」「多文化を主題とする演劇と上演する身体」「グローバリズムと主流社会の文化」という三つのカテゴリーを設けた。そして、アジア太平洋で受容されていくオーストラリア作品群と、移民・難民や先住民などのマイノリティの演劇と、おもに主流文化が作り出す演劇について、三者の相関関係を明らかにした。方法としては、①アジアでの翻訳、国際共同制作についての上演・受容の分析②マイノリティの演劇の方向性についての統計的な調査と、演じる俳優の身体とエスニシティの問題に焦点を当てた上演の分析③大規模でグローバルな観客を想定した作品の上演・受容の分析を行った。

４．研究成果

（１）アジアでの翻訳・国際共同制作についての上演・受容

オーストラリア演劇を題材にした国際共同制作に、研究者／実践者両方の立場から参画し、シンポジウム等を開催して、オーストラリアと日本の演劇人、そして観客からの反応を取材した。その中には、2014 年度に行われた、メルボルンの小劇場 AUTO DA FE と新宿梁山泊の共同制作作品『エブリマンとポール・ダンサーたち』と、日本演出者協会国際交流プログラムで、劇作家アンドリュー・ボヴェル作『聖なる日』リーディング上演が含まれる。後者は、日本に招聘されたボヴェル自身から作品の意図を取材し、また日本の観客の感想をシンポジウムを通して聴取した。この研究成果は、2020 年度に行われる『聖なる日』本公演の制作に、研究者がドラマトゥルクとして参画することで、実地に活かされることになる。

静岡県舞台芸術センター（SPAC）と連携し、SPAC 主催「ふじのくに・せかい演劇祭」が招聘した先住民劇団イルビジェリによる公演『ジャック・チャールズ vs 王冠』において、研究者は台本の字幕翻訳 と字幕操作作業を行った。この作業を通して、出演者であるジャック・チャールズ、演出者であるレイチェル・マザ、またプロデュースを行った日本側スタッフ に取材やインタビューを行った。また SPAC からの協力のもと、観客の意見・感想を収集した。また早稲田大学にレイチェル・マザを招き講演を実施し、参加者か らの感想・証言の収集を行った。これら得られた資料を基にして、まずシンポジウム「「ポストファクト時代における Globalizing reconciliation のゆくえ」 （オーストラリア学会関東例会／東京外国語大学）にて報告を行い、加筆の上論文「ファクトとフィクションを行き来する身体：『ジャック・チャールズ vs 王冠』」を執筆し、オンラインジャーナルにて発表した。

（２）メインストリーム文化へのエスニックマイノリティの介入の分析

戦争を主題にした、メインストリーム文化へのエスニックマイノリティの介入について分析し、演劇作品を通して多文化社会の一面を明らかにした。具体的には、アラン・シーモア作『年に一度のあの日』とトム・ライト作『ブラック・ディ ッガーズ』を取り上げ、実践をともなう様々な角度からの調査・分析を行った。2015 年は、第一次世界大戦で ANZAC 軍（オーストラリア・ニュージーランド連合軍団）がトルコのガリポリ半島に上陸して 100 年という節目の年だった。かつてはアングロ系白人によって 独占されていた ANZAC 神話も、今日オーストラリアの多文化社会を反映し、アングロ系以外の様々な民族出身の ANZAC 兵の存在が、研究 やメディアを通して掘り起こされるようになった。『年に一度のあの日』は 1960 年代に書かれた作品で、元軍人として国に奉仕した誇りを持つ主人公と、それを否定的に見つめる大学生の息子との間の価値観の衝突を描いている。主人公は移民に対する反感を露わにするなど、オーストアリア

のナショナリズムと多文化主義との関わりについても言及されている。オーストラリア演劇の古典となったこの作品を、日本語に翻訳しリーディング上演を行った上で、シンポジウムを通して掬い上げた観客の反応を分析する作業を行った。また『ブラック・ディッガーズ』は、これまでナショナルな神話の中から除外されてきた先住民の ANZAC 兵に焦点をあて、新しい ANNZAC 神話のナラティブとして、その年にもっとも注目されたオーストラリア演劇となった。この作品のもつ、戦争の記憶への介入という先住民の戦略について、フィールドワークと分析を行い、また『年に一度のあの日』との比較研究によって、ナショナル・アイデン ティティと今日の多文化状況がどのように関わりを持つのかを明らかにした。この研究成果は、まずシドニー大学で開催された国際学会 Wounds, Scars and Healing: Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation で口頭発表され、さらに論文「戦争の記憶とオーストラリア先住民演劇：『年に一度のあの日』から『ブラック・ディッガーズ』へ」としてまとめた。

（3）多文化社会の負の描写とグローバルな読み替えの検証

オーストラリアの多文化社会の影の部分を鋭くえぐり取り、今日まで再演が繰り返され「古典」化したアレックス・ブーゾ作『ノー ムとアーメッド』（1968 年オーストラリア初演）を、調布市の公営劇場であるせんがわ劇場と連携し、日本初の上演、シンポジウム、 レクチャーを含む一連のイベントを行った。それらを通して登壇者、参加者からのリアクションを取材し、今日のグローバリズムの翳りと日本を含め世界中で起きている不寛容で排他的な状況において、半世紀前のオーストラリア戯曲をどうのように読み直すことがで きるかを検証する重要な一次資料を得ることができた。 本研究の成果は、論文「『ノームトアーメッド』：読み替えられながら不寛容な社会を映し出す舞台」としてまとめた。

（4）多文化を主題とする演劇の展開

グローバリゼーションの進展する中での多文化を表象する現代演劇の多数の上演について、フィールドワークを行った。特に、2010 年の初演以来その重要性により頻繁に再演を重ねているアボリジニ演劇『コランダーク』につい ては、テクストの成立史を含めて豊富な資料を収集できた。

オーストラリアの多文化社会を構成する日系オーストラリア人を主題にしたマユ・カナモリ作『ヤスキチ・ムラカミ』について、作 家、上演プロデューサーにインタビューを行った。また戯曲の日本語訳を行い、2020 年度以降の日本での上演＋シンポジウムのための準備を進めた。

オーストラリアと日本の表象芸術を通した接触について資料収集と分析を行い、得られた結果は、論文「オーストラリア映画・演劇と日本」としてまとめた。本論は、2019 年 9 月に単行本に収録され出版される予定である。

オーストラリアの主要都市（シドニー、メルボルン、アデレード）に調査出張を行い、多文化とグローバリズムを扱った演劇作品についてオーストラリ アでフィールドワークを行った。中国系移民、スリランカ難民などを扱った作品についての資料を収集した。本研究の成果は、国際演劇協会『国際演劇年鑑』において、2015 年、16 年、17 年、18 年と、研究期間中毎年、詳細な報告と批評を含む論考を発表した。

さらに、先住民演劇の展開について議論する単行本『オーストラリア先住民とパフォーマンス』（東京大学出版会）を上梓した。

（5）サスティナビリティ、ディスアビリティ、グローバリズム：オーストラリア主流社会における主要テーマの検証

またハニー・レイソン作『絶滅』上演についてのフィールドワークを通して、現代オーストラリア演劇における重要なテーマとして浮上しつつある「サスティナビリティ」と作品との関わりについての資料を収集・分析した。本研究成果は、論文「演劇における環境のサスティナビリティ」としてまとめた。

また、国立劇場でシンポジウム「ハンディキャップと演劇」を共同開催し、世界とオーストラリアにおけるディスアビリティ演劇の概要と、同時期にメルボルンで初演された『エレファントマンの現実と想像上の歴史』についての論考を口頭で報告した。

また、グローバリズムと多文化を反映したオーストラリアの舞台芸術の例としてオペラを取り上げ、その歴史と現在について調査し、その成果を、共編著の単行本『キーワードで読むオペラ／音楽劇研究ハンドブック』として公表した。

オーストラリアの多文化状況について の基礎研究を進め、その成果を、グローバルな視点に基づいた文学作品と演劇作品の比較研究として、論文「世界文学としてのピーター・ケアリー」にまとめた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　3　件）

①佐和田（澤田）敬司、ファクトとフィクションを行き来する身体：『ジャック・チャールズ vs 王冠』、クァドランテ：東京外国語大学海外事情研究所、no.21、2019、129-135
http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/93323

②佐和田（澤田）敬司、「『ノームトアーメッド』：読み替えられながら不寛容な社会を映し出す舞台、人文論集、56、2018、29-46
③佐和田（澤田）敬司、戦争の記憶とオーストラリア先住民演劇：『年に一度のあの日』から『ブラック・ディッガーズ』へ、人文論集、20、2016、1-18

〔学会発表〕（計　2　件）
①佐和田（澤田）敬司、オーストラリア先住民演劇が目指すところ、日本英文学会、2017
②Keiji Sawada, “War Memories represented in theatre: The One Day of the Year, The Floating World, The Spirits Play”, International Symposium at the University of Sydney, “Wounds, Scars, and Healing: Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation, 2015

〔図書〕（計　3　件）
①Keiji Sawada et al., Routledge, Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation: Wounds, Scars, and Healing, 2018, 12
②佐和田（澤田）敬司　他編、アルテスパブリッシング、キーワードで読むオペラ／音楽劇研究ハンドブック、2018、（編著のため頁数掲出不能）
③佐和田（澤田）敬司、東京大学出版会、オーストラリア先住民とパフォーマンス、2017, 264

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。